



# 筑紫女学園大学リポジット

## The Current Situation of Minority Tribes in China: An Introduction

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/928">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/928</a>

# 中国少数民族の現在を考える ～序論～

石 其 琳

## The Current Situation of Minority Tribes in China: An Introduction

Kilin SEKI

### 前 言

本論は筆者が長年中国少数民族について、様々な視点から調査研究した成果をまとめた論集のための「序論」である。論集本体は主に少数民族の今を考え、その現代化の実態と問題点を考察する内容である。中国の多民族は古より現在の形ではなく、彼らの今を考えるにあたって、その昔から複雑な民族構成と形成の由縁を知ることが必要視される。

多民族国家「中国」は、一つの国として、少数民族が不可欠な存在である。昔中国周辺の「異民族」の多くは、現在新たに「少数民族」と認証されている。中国という多民族国家の形成は、この中国の大陸を舞台に、古より多民族が絶え間なく、多くの歴史事実を経過する中、混合交差し、長い歳月とともに歩み続け、現在では一つの国として作り上げられた結果である。本論は、その深層構造の事実を理解するため、まずそれまで経過した地歴、政治、文化など多様な形成要素を育み、中国の歴史における多民族国家形成の由縁を概説し、歴代王朝を通して、重点的歴史事実を取り上げ、多視点的に中国という多民族国家の特徴性を考える。

以下はまず論集内容に深く関わるタイトル「はるか遠くの彼方へ」を名づけた由来と意義について説明し、各論文を収録する理由と目的の解説も加える。

### I 論集のタイトルについて

この論集は中国の少数民族地域におけるフィールドワーク調査研究の集大成である。まずこの論集に「はるか遠くの彼方へ」のタイトルを付けた理由を説明したい。その由来は、中国人なら誰でも気軽に口ずさみ歌えるある有名な中国民謡「はるか遠くの彼方へ」（中国語名：在那遥远

的地方)の歌詞から由来するのである。この歌は別名「草原情歌」で、中国の代表的民謡「茉莉花」(ジャスミンの花)の歌とともに、世界的に有名になっている。そして、この歌は日本においても縁が深く、1961年ザ・ピーナツによって発表されて以来よく知られていて、1983年12月NHKの「みんなのうた」でも紹介されている。

この歌の制作背景については諸説あるのだが、1938年王洛賓(1913-1996)が新疆のカザフ族の民謡をもとに、映画の曲として作詞、編曲した歌である。そして創作者王洛賓がこの歌で、1994年国連の教育、科学、文化組織(UNESCO)の東西文化交流特殊貢献賞を受賞したのである。歌の内容は、ある漢民族の青年がはるか遠い彼方で、現地民族の若い娘への恋情を描写したものである。優美な民族風メロディと簡潔な抒情的歌詞が高い芸術性を醸し、人々に愛唱され、中国国内だけに留まらず、世界各地の華人たちに深い共感を与え、最も広く伝唱された歌の一つとなったのである。最近では、2007年中国で打ち上げられた人工衛星「嫦娥一号」に搭載された中国の代表的な歌の一つにも選ばれたのである。この歌が最も人に魅せられたのは、やはりその漢民族と少数民族の間に生れた純粋な恋が、人々に遠い彼方への憧れ、古より少数民族の居住地、いわゆる「異域」に対する神秘的イメージを想像させ、心に美しい情念を醸し出すところであろう。

本書「はるか遠くの彼方へ」は、このゆかり深い「草原情歌」の歌詞が語る「はるか遠くの彼方へ」の潜んだ神秘的イメージを想像しながら、これまで文献書物の研究で得た蓄積された知識の領域から飛び出し、自ら多くの少数民族の住む彼方へフィールド調査を行った心境を表現し、理解を深めたいからである。そして、調査の実際に関しては、必ず自己の足で、多くの少数民族の人々と出会い、彼らの「現在」を観察するのである。毎回の調査期間は、全てが一月ほどかかり、なるべく長時間その地域に留まることによって、より深く現地の生活を体験でき、人々と馴染めるようにしたいと考えたのである。

本書で多く取り上げた内容には、現在すでに「秘境」ではなくなりつつある「遠い彼方」に住む彼らに対し、それぞれ抱える最も興味深い問題に注目し、少数民族の「現代化」という、国から与えられた政策のもとで、その生活の実態と意識変化について多方面から、その現実問題を考察したのである。

さて、本書を読む前に、まず中国という多民族国家は、なぜ「多民族」で構成されているのか、またその他の「多民族国家」とどこがどのように違うのかを理解する必要がある。

## II 中国多民族国家の特徴性

中国は多民族の国家である。2016年の世界人口白書によれば、約13億6782万の人口に、現在56の民族がいる中、漢民族の人口が約9割強であり、その他は少数民族に占められている。人口比率が少ないとは言え、数字的に見れば少数民族の人口は日本の人口に匹敵するほどである。この多民族を含む莫大な人口を抱える中国を見れば、その複雑な「多民族国家」の現実が実感できるであろう。実際中国という多民族国家は、世界中多数ある多民族国家でも、民族構成において、

その形成された地理と歴史的、文化的背景要素ではかなり特徴性を持っている。この点について考察を進めれば、中国の悠久な歴史形成背景を知る必要があり、かつ重要視せねばならない。以下は、まずこの点から述べていく。

## 一 中国における多民族国家形成の歴史背景

元来中国の《春秋》、《詩経》、《周易》、《尚書》、《論語》、《礼記》など多くの古文獻から「中国」の意味に関する記述では、「国家」としての概念ではなく、ただ一つの「地域」と考え、国家の中心部分の「京師」を指し、現在で言えば「首都」である。古代人の観念では、「天下」の他に「海内」、「四海」の言葉が国家の概念と同等な意味を持つのである。そして「天下」と言えば、広く中華文明発祥の地の黄河中、下流平原地域の「中原地区」だけではなく、その周辺の少数民族が住む地域も含まれている。実際に「中国」とは、1912年辛亥革命後の中華民国が「五族共和」を掲げて建国した時、初めて「中国」の呼称が正式な現代国家の名称として確立されたのである。

(注1)

中国という国家の成立は、数千年という長い年月を通して、この同じ「土地」で、数多くの王朝がそれぞれ統治力の興衰を交替させ、激烈な争いと犠牲を払っている。中には多様な民族との抗争、融合を重ね、文化、血源の交流混合しながら、人々が生きた痕跡を残し、国を形成してきたのである。また古来より、この土地に住む人々は、農業、狩猟、遊牧など多様な生業を営み、さらに多数の異なる宗教の信仰者が共存する「人種のるつぼ」という異様性を多く含む中国の「多民族国家」としての現在が成り立つのである。

いま中国の民族の構成実態、それに関わる諸問題を考える際、現状を見るだけではその長期かつ重層な形成背景が理解しにくいであろう。文献記録のある歴史事実を検証すれば、数千年と言われる中国の歴史の中、決して現在最大人口を占める漢民族が常に優勢に立ったわけではなかったし、国土も大きく変化し続けていたのは明らかな事実である。中国という多民族国家の構成を理解するため、少数民族の歴史状況を知ることは欠かせないと言えよう。ここでは、多くの研究文献資料を基に、重点的に中国の歴史時代の変遷に沿って、多民族の視点を踏まえて簡単に述べていく。

神話の時代として、三皇の伏羲、神農、女媧の時代に続き、五帝の黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜がいる。舜の後に禹が夏王朝を建て、有史時代の殷、周と合わせて歴史上「三代」という。約四千年前から、中国大陸の長江、淮河から黄河下流まで「九夷」と称する民族が存在していた。他に「東夷」の重要支派が殷、周、春秋、戦国期に多く小国を建てたが、華夏族（のちの漢族）に融合したのである。南方には蛮族がおり、西方は戎族、北方は狄と称する民族がいた。中原地区には「炎帝族」が存在したが、他に有名な「黄帝族」が西北で遊牧しながら中原へ遷移し定住したのである。この黄帝族は「華夏族」の始祖である。歴史上堯、舜の他、夏、商、周(BC770まで)三代ともに黄帝の後裔で、考古学によれば、紀元前の四千から三千年前までの他の民族より高い「仰韶文化」(注2)は、黄帝族の文化であると考えられている。夏、殷、周の時代において、黄

帝族が北から南へと発展して、他民族の羌、夷、戎、狄、苗、蛮などと混住し、経済、風習、言語など文化の相互交流、更に通婚することで、多民族の融合が進み、後の華夏族の基礎が形成されたのである。

春秋時代（BC403-BC770）は、華夏族と戎狄蛮夷が百国以上から戦国時代の七つの国に統合された過程に、華夏族の大国が異民族の小国を統一して、史上最初の民族文化大融合の時代であった。紀元前221年秦の始皇帝は中国を統一し、東の長江、淮河流域の夷と南方長江流域と漢水流域の蛮、巴、蜀、閩、浙、珠江流域の百越、西の戎の一部地域に郡県を設置したのである。紀元前206年秦の滅亡後、漢王朝では秦時代で統一できなかった異民族の匈奴、西域の諸侯、東胡の鮮卑、烏桓、西方の羌の大部分をも統一している。

漢代初期では、匈奴が強大だったが、後に自ら南と北に分裂され、47年南匈奴が漢王朝へ帰順し、91年北匈奴も漢によって統一された。そして北匈奴の一部はヨーロッパへ、後にハンガリーの祖先になったという。世界史においても広く影響を与え、重要視せねばならない存在である。ここで匈奴族の中国多民族の歴史における位置づけについて、特に触れてみたい。

匈奴は自分の文字を持たない民族であるが、初めて注目された有名な異民族として、古来中国の正史に載籍されている（注3）。彼らは強大な勢力を持って、長く中国北方地域で活動を続けたのである。秦の始皇帝（BC215）は將軍の蒙恬に匈奴を討伐させ、匈奴を駆逐し、北方騎馬民族の侵入を防ぐため長城を修築したのである。ある意味では、匈奴族の存続過程が中国の歴史と重層しており、中原地区の漢民族と頻繁に接する過程で相互に封建、経済、文化の影響を受けている。最終的に中国の歴史に同化し融合されたのち、現在中国55の少数民族の中には、古来の「匈奴族」として存在していないのである。その広範囲における強勢な活動は、世界史に一定の影響を与えている。そして匈奴史の研究においては、世界的学問として、早くから18世紀のフランス人J. Deguignesの著作がみられ、既に200年余りの歴史がある。匈奴族が発展する過程に生じた様々な歴史現象は、後の北方民族に対する理解と研究に有力な参考価値があると指摘されている（注4）。その存続の痕跡からは、中国の多民族融合、相互同化の過程と多元的国家形成背景において、典型的かつ重要な一側面が伺い知れる。

漢代には西南夷と総称された民族がいたが、漢に吸収され、漢族と雑居していた。漢代の東北地区には烏桓、鮮卑、扶餘、挹婁の民族がいたが、漢に帰順し、移住などにより漢族に吸収された。

三国時代（220-280）には、魏、蜀、呉の領域に、それぞれ多くの少数民族が住んでいたが、この時期では、烏桓族の大多数が漢族に同化されたほか、大半の少数民族は、最も戦乱と抗争が激しい両晋（265-419）、南北朝（420-589）時代へ入った。280年晋王朝が建国され、秦、漢政権以来三度目の「中国統一」であったが、すぐに匈奴を含む北方の民族（五胡）が中国に進入し、次々と十六国を作って、歴史上「五胡十六国」の戦乱時代へと突入した。この「五胡十六国」とは、七つの民族の匈奴、鮮卑、羯、氐、羌、巴、漢が建てた、二十三の政権である。百年以上の混戦を経て、北方は鮮卑の北魏によって統一され、南方の宋朝と対峙関係になり、南北朝時代に

入ったのである。

上述したように、中国の長い歴史に存在した数多くの王朝において、異民族が人口の多い漢民族を支配する事実もたびたび発生している。そしてその支配を成功させる統治方法として、彼らが自ら漢化する道を選択することを要求される現実的背景も常にあった。ここで一例を取りあげてみる。それは中国歴史上最も名高く知られている南北朝時代の北魏孝文帝（471-499）が行った徹底的漢化政策の歴史事実である。彼の漢化による統治には、「官僚制度」、「国家祭祀」、「風俗習慣」、「封爵制度」、「宗廟制度」などの政策改革が実施されたのである。ここで特に注目すべきなのは、官僚制度について、全面的な中国的官僚制度を採用し、文官に漢人を多用したことにより、当然漢文化の影響を多方面において大きく受けついだことである。更に北魏が統治側として、漢民族への支配権を示し共存できるため、毎年皇帝の威権を誇示する極めて重要な祭天儀式を、従来の北方民族の「西郊（都の西）祭天」を廃止し、中国的な「南郊（都の南）祭天」へ変え、都を中原の地の洛陽に遷移したのである。そして孝文帝自ら漢語の「元」に改姓し、さらに胡服、胡語の使用禁止によって、漢語が公用語の地位を確定された結果、支配族が母語を忘却する状況で、漢民族と通婚する風潮も自然に多く生じたという（注5）。このように当時の支配民族の鮮卑族が被支配民族の漢服と漢語を採用し、都の遷移などという現実には、非漢民族国家が中国を統治する際、文化レベルなどの格差の背後に、どのような問題が生じているか、完全支配を遂行することの難しさが伺い知れる。そしてこの北魏孝文帝がとった政策には、歴史上における漢民族とほかの多民族の同化が一層深まった結果に繋がった事実を示唆している。またこれは現在の漢民族形成の過程における不可欠な背景要素として、重要視せねばならない事項である。

後漢末から続いた社会の大動乱は、民族の遷移に大きな推進力をもった。辺境地区の多数の異民族が大量に中原地区へ進入し、同時に漢民族の一部は異民族地区へと移動したのである。この時期において、他の民族の生業も漢人と混住する中、牧業から農耕へと変化し、戸籍の編入、通婚などによって漢化されていた。よって、歴史上、晋南北朝以後、匈奴、鮮卑、羯などの民族の独自の活動を見ることが出来なくなり、羌、氏族も中原へ移住した集団は漢族に同化されたのである。また一部の漢族が異民族に同化されたのもあったという（注6）。

隋唐（581-907）の時代へ入ると、北方には突厥（注7）政権が強大だったのだが、回紇（ウイグル族）によって滅ぼされた。その後840年ウイグルはキルギス族に撃滅され、その一部が今の新疆地区へ、後にウイグル族となった。西南地区にソンツェン・ガンボが分裂した吐蕃（チベット地区）を統一し、唐と親交政策を行った。641年唐の太宗は文成公主をソンツェン・ガンボへ嫁がせ、更に710年に金城公主もチデ・ツクツェン王に嫁がせ、和親関係を持ち続け、長安で盟約を締結し、その経緯を記した「長慶会盟碑」碑文は今でもラサの大昭寺の前にある。

歴代において、上述の政略結婚例は、春秋時代より始めているが、「和親」を政策にしたのは漢の高祖（BC206-BC195）からである。それ以後歴代の王朝、漢民族と異民族の間、または異民族の間で行われた例が多数の文献に記録されている。大多数の和親政策は民族間の友好関係を深め、経済文化交流を促したと言える。反面他民族を征服するための手段と考えると、目的は多

様である。実際に唐王朝の公主が殺されてしまったこともある。異民族間に親睦交流を推進しながらも、相互的利害関係の深刻さが露呈されている。

738年唐王朝は、南方にあった六詔政権中の「南詔」の首領を雲南王に封じ、他の五詔を統一させた。南詔は唐の文化を好み、毎年唐に使節を派遣し、人を漢地へ留学させていた。唐王朝に続き、907年から960年までの間、中原地区に五つの王朝と南方や現在の山西地区に続けて出現した十個の国があり、この間、中国歴史上において、第二の大分裂と割拠の時代となった。戦乱が続く過程で、各民族それぞれが経済、文化的に大きな打撃を受けたのである。

960年中原地区にいた後周国の將軍趙匡胤が軍事クーデターを起こして、北宋王朝を建てた。その北方に契丹（916年「遼」と改名）、羌族が建てた「西夏」国及び女真族の「金」国が宋王朝と対峙していた。西夏は漢字の筆画で西夏の文字を作り、多くの漢文経書、史書を翻訳した。北宋と遼は金によって滅ぼされ、南宋王朝が国を建て金と対峙した。金は先秦時代にいた肅慎族の末裔だったのだが、時代ごとに名前を変え、遼、宋、元、明時代は「女真」族と称し、漢族とは長期的に交流を持っていた。漢族の文化を吸収し、漢語が女真の通用語になっていた。漢文の書籍の翻訳、朝廷の儀礼制度も漢族に倣い、漢族との通婚も増加している。唐王朝の滅亡後の西域は、于闐、高昌に及び、文化レベルが高く「突厥語大辞典」を書き上げ、突厥語を話す民族（トルコ系）のカラハン政権があった。そして雲南、四川南部地域に白族の大理政権が南宋とも交流を続けたが、1206年南宋を滅亡させた元王朝を建てたモンゴルによって統一されたのである。

元王朝は、中国史上、最初に少数民族のモンゴル族によって全国が統一された政権である。当時の統治領域は、東部沿海から西部の新疆ウイグル自治区の全地域、南では台湾を含む南海地区、北のシベリア大部分地域、西南地区のチベット、雲南地域、東北にオホーツク海までである。この時期において、特に注目したいのは七世紀の唐代より十三世紀チンギスハン征西頃から、政治、軍事、経済と文化など様々な理由によって、次々と中央アジア各民族、ペルシャ人、アラビア人などイスラム宗教の信者の多数が中国境内への移住を強いられている。西北、西南及び中原各地で現地の人々と混住し、言語は漢族に同化され、のちに中国最大のイスラムの民族集団「回族」形成の基礎になったのである。

1368年元王朝が崩壊し、明王朝に取って代わられた。モンゴルの残存勢力の大半は長城外へ逃亡したが、絶えずに南下して騒乱を起こしている。よって明朝の政府は長城を補修し、防御を強めたのである。明代には大きな少数民族地域の政策として、重要視せねばならないのは、当初元朝の「土司制度」を受け継ぎ、雲南、貴州、広東、広西地区に「土司」という管理職を設け、各族の首領を世襲官職とし、住民を支配させた。しかし土司と政府間または土司相互での争乱が絶えないため、「改土帰流」として、これら少数民族地域の「土司」を漢族の役人「流官」の派遣配置へと制度転換させたのである。中央の支配力が強まり、ヤオ族、チワン族、ミョウ族の武装反抗もしばしば起こっていた。新疆地域とチベットも支配を広げ、特に密接な経済関係があった。東北地区は女真族が漢族地区から鉄製の農具を受け入れて農業を進め、漢族と経済、文化の交流も多かったのである。

上述した「女真族」は、のちに清王朝を建てた「満族」の古い名称であり、漢代より隋唐の時代までそれぞれ異なる呼称で呼ばれてきたのだが、北宋・明代に至って「女真族」と発展した。1583年、建州女真族の首領ヌルハチが女真族の各派を統一し、国号を「後金」と変えた。1636年後金政権は「清」と改名され、後に明王朝を倒して、中国歴史上、少数民族が建てた政権が全国支配する2度目の王朝となった。清の領域は西へ今のバルハシ湖、チュー河、タラス河流域、パミール高原まで、北はアルタイ山脈、サヤン山脈まで、東北は外興安嶺オホーツク海まで、東は東海まで、台湾及び付属する諸島、南は南海諸島、西南は広西、雲南、チベット、ラダクまで、中国歴代王朝において最大の版図を得たのである。別の意味で、この清王朝は、広大な中国大地にいる数多くの民族を統一支配することになり、一つ大きな多民族国家を成立させたのである。

元王朝のモンゴル人の中国支配が約百年あったのだが、支配策としてある身分制度が実施され、一般の庶民に4つの身分階級を決めていた。モンゴル人、色目人(ウイグル人、イラン人など)、漢人(旧金政権支配下の漢人、契丹人など)、南人(旧南宋治下の住民)の4階級に分けられた。モンゴル人に政治の要職を独占させ、あらゆる特権を享受し、色目人はモンゴル人の不得意な財政などを担当することで、支配者側に加えられた。実際に人口数が最も多い漢人と南人は、被支配者の地位に置かれ、政治の中枢に参画できず、法律上でも著しい差別があった。この身分制度が実施された事実から、当時国家における複雑な民族構成の実態が強く反映されている。

清王朝の統治には、被支配者たる漢人に対し、威嚇と懐柔の両面策をとっている。「辮髪」と「胡服」を強制したのである。これは漢人に屈辱を感じさせ、のちに広東出身の洪秀全が反清抗争を起こした際、故意に髪を伸ばし「長髪賊」と呼ばれた由縁となった。現に中国女性の民族衣装として有名なチャイナ・ドレス(旗袍)の原型は、満州族の伝統的服装である。異民族として、自分より高レベル文化を有する民族を統治するには、上述した北魏孝文帝の漢化政策のような実例もあるが、やはり劣等意識から強圧的支配策を採ることが避けられないのである。

元王朝の13世紀から14世紀の支配で、既に非漢民族であるモンゴルの影響が大きく、その上1644年以來の満族王朝清の支配より、多民族の大帝国が成立し、領域内の各民族の言語、宗教信仰、生活習慣、思想観念が新たに組み込まれたのである。そして大清帝国の領土を受け継ぎながら、1912年その延長線に位置する中華民国が成立され、続いて1949年中華人民共和国が建国から現在に至るのである。

現在世界の国々において、単一民族国家が少ない中、近現代より大規模な多民族国家、例えばアメリカ、旧ソ連のような多民族国家も出現している。しかしそれぞれの構成要素について比較をみれば、多民族の中国形成に関わる多方面での複雑な背景は大きく相違するのである。その点に関して、これまで述べてきた内容からも理解できよう。この広大な中国の大地で、数千年の時空に渡り、漢民族は周辺民族と長年の戦い、政治統合、更に文化と血統の複雑な融合を繰り返しながら、共に歩んで来た厳しい過程とその長い歴史的痕跡により、「多民族中国」の特徴性が蓄積されたのである。

## 二 少数民族の分布

中国の面積は約960万平方キロメートル、世界面積の15分の一、ヨーロッパの面積とほぼ同じである。そして南北の距離約5500キロメートル、緯度を測れば約50度がある。東西での距離約5200キロメートルあり、時差は実際に約4時間以上である。しかし現在は全国で北京の時間を生活標準時にしているため、この時差が特に遠く離れた新疆、チベットあたりの地域において、日の出と日の入り時間のずれが生じ、現地の生活習慣に影響を与えている。

中国の陸の国境線は22,800キロメートル。14の国北朝鮮、ロシア、モンゴル、カザフスタン、キルギス、タジキスタン共和国、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、ミャンマー、ラオス、ベトナムと隣接している。また少数民族が集中的に居住している地域は、この長い国境線の内の19,000キロメートルがあり、多くは国境周辺地域になっている。そして現在少数民族の集中居住区の多くが国境地帯であるのは、上述した中国の歴史形成過程を検討すれば、昔の中原地域の漢民族と周辺多民族それぞれ集中住む地域の名残であることが理解できよう。

現在中国政府の政策によって、幾つかの大きな民族自治区として、「新疆ウイグル自治区」、「寧夏回族自治区」、「チベット族自治区」、「広西チワン族自治区」、「内モンゴル自治区」の五大自治区のほかの自治区内外に、30の自治州と124の自治県が設置され、各民族が自分たちの文化伝統、生活習慣を保ちながら、集団的に居住できるようになっている。現在では、少数民族の教育、経済など多方面の理由により、それぞれの生活事情、または生活力を高めるにともない、多くの少数民族はほぼ全国各地に散在している。同時に、各自治区においても、少数民族の居住者が多く占められてはいるが、多くの自治地域においては、実際に漢民族を含めて、多民族が混住しているのが現状である。

古来各少数民族によって伝承された独自の生活習慣と文化伝統は、各民族が住む地域の自然環境に適応し、影響を受けながら形成されている。少数民族の分布する地域は、それぞれ狩猟、遊牧、オアシス農業、焼き畑農業、漁業、稲作など様々な生業を行っている。ここでは研究資料(注8)を基に、実際に地理的な視点から、少数民族が居住している地域の自然状況と生業について説明を加える。

一般に中国の地形について、四つの段階に分けられる。西から第一段階として、4000メートル以上の青康蔵高原地帯では、耐寒性作物を作り、遊牧生業が中心で、主にチベット族に代表されるチベット系の民族が住んでいる。第二段階は3000メートル以下の高原と大盆地である。これは内モンゴル高原、黄土高原、雲貴高原とジュンガル盆地、タリム盆地、四川盆地の地区が中心である。内モンゴル高原ではモンゴル族が住み、放牧、遊牧などを行っている。四川盆地には彝族が多数住んでいるが、雲貴高原と同じ稲作、小麦、トウモロコシなど農業が主体である、山地ではミャオ、ヤオなど狩猟、焼き畑農業に従事している少数民族もいる。タリム盆地では砂漠に点在するオアシス農業を行い、イスラム教徒のウイグル族などが住んでいる。次に第三段階では海拔500メートル以下の地域である。この地域は華北平原、東北平原と長江中下流を含む大規模な

平原地帯である。この地域では古来から人々の活動中心地帯であり、人口密度が高く、豊かな農業地帯になっており、漢民族が多く住んでいる。東北地方では、満州族、エヴェンキ族など狩猟に従事してきた民族が住んでいる。第四段階では、海岸線を中心とする地帯である。この地帯では、舟山群島、台湾、海南島など5000以上の島々が含まれている。生業としては稲作、漁業であるが、半農半漁のキン族と台湾の先住民の高山族、海南島のリー族などが住んでいる。

以上述べてきたように、各民族が長年居住している地域の自然環境が多様であるため、その自然環境に適応しながら生業を営むことによって、それぞれの文化伝統も独自性を持っている。伝統文化、生活習慣、信仰が多様であるが故に、莫大な人口の漢民族に関わらず、相対的に数少ない少数民族同士においても、その相違性が時にはトラブルを生じさせるものになりかねないのである。少数民族だけを見ても、それぞれの地域における自然、人為の環境条件に格差が存在し、また長い歴史の流れにおける位置づけも異なるため、民族間に伝統文化を相互的影響しあうと同時に、多様な摩擦が生じるのも避けられないであろう。

実は古来同じ地域で住み続ける民族もいれば、長い年月を経て、戦乱などを理由に、民族自身が各地へ遷移することにより、その歴史現実が大きく変動されたのも多くみられる。よって、現在中国の少数民族というのは、長い年月を経たそれぞれの歴史事実が考証され、多方面において、その実態が確認されたうえ、新たに政府より認定されたのである。次はこの点について述べていく。

### 三 少数民族の認定

現在一般に「民族」という呼称が広く認識され、植民地主義時代終焉の後に、新たな人権概念として重要視され、世界に定着している。しかしその言葉の定義については、古今東西、時代、地域などにより、「民族とは何か」をめぐる、多くの論議が繰り返されたにもかかわらず、定説が実に難しいと考えられている。いま世界各地では様々な民族の集団的概念が強調されるとともに、民族意識の覚醒が生じ、異なった方向へと進み、各地で多種類の紛争問題の起因にもなっている。

中国において、民族問題も中国ならではの歴史、政治と社会などの背景を配慮し、独自の概念と定義を確定させ、現在は、国内に少数民族の自治区を設置し、漢民族以外に55の少数民族として認定されている。昔この中国の広大な土地で生活する様々な民族は、多くの生活習慣、宗教信仰などの相違によって、互いに敵視する立場もあったのだが、現在は、自国の特徴的事情を踏まえ、理念と定義などの条件に従い認証された各民族は、政府の民族平等政策の下で、多くの歴史経験に潜められた民族間の恩怨と葛藤を抱えながら共に生き、そして国を営むのである。

厳密に「民族」というのは、学術的に考えれば、近代資本主義が生み出した概念であると言われている。中国の場合、いわゆる「異民族」との関わりがあまりにも時空的に長く、かつ相互的複雑な歴史関係が深かったが故に、学問的、そして現実的においても、それらの定義が中国の事情に適用困難な要素が多く存在するのも事実である。中国の歴史過程から考えれば、原始共同体

として多くの「部族」または「部落」を民族として考えるのは適切ではないとの指摘もあるが、1953年の国の報告では、名乗る民族数が400もあったのである。実は民族識別作業が始まる前、有名な民族学者の費孝通氏が53年当時の民族状況が極めて複雑であることを指摘している（注9）。本来は漢族なのか、少数民族地区へ移住して久しく、漢族が他民族とみなされた、または非漢族であったにもかかわらず、戦乱などの理由で漢族を名乗ったり、民族が四方に分散して、他民族にみなされたケース、民族内部で同一の民族かどうか意見が分かれているなど複雑な現実問題がある。そしてこれらの実態の背後に、民族のアイデンティティ及び言語を失い、民族間の認識の違いにより、相互差別が生じているなど、実に各式各様な事情が存在していた。この実態を受け、民族の自治区の設置と同時に、まず各民族の認知工作が重要だと考え、政府による民族の識別作業を進められることになったのである。そして民族識別の基準では、特に中国の民族概念の特徴性が重視されている。

中国における民族の識別には、実際に漢民族の形成過程とも深く関係するのだが、歴史、地理、考古、経済、文字、言語などの学問的視点から考証する必要がある。同時に特に共通の民族感情と意識を重視している。中国的「民族」としての特徴性を考慮し、多くの既定の民族定義より広義的、且つ柔軟に考慮されているのである。この識別作業は、長時間をかけ、およそ三段階に分けて完了している。

第一段階とは、1949年の建国より1954年までである。建国当初では、既にモンゴル族、回族、チベット族、ウイグル族、ミャオ族、ヤオ族、イ族、朝鮮族、満州族の九つの民族が存在している。1950年以後、各地域において民族調査が始められ、当時400件の民族申請から、チワン、ブイ、トン、ペー、カザフ、ハニ、タイ、リー、リス、ワ、ガオシャン、トンシャン、ナシ、ラフ、スイ、ジンポ、キルギス、トウ、タジク、ウズベク、タタール、エベンキ、ボウアン、チャン、サラ、ロシア、シボ、ユーク、オロチョンの29の民族である。

第二段階は、1954年から65年の期間である。1954年より中央民族事務委員会が雲南、広東、湖南、貴州各地の調査を実施し、56年には全国民族代表民族委員会の指導の下、20余りの民族地区で歴史学、考古学、地理学、経済学的調査を行い、「少数民族社会歴史報告書」が作成され、64年に終了したのである。この時、新たにトジャ、シヨオ、ダフル、ムーラオ、ブーラン、コーラオ、アチャン、プミ、ヌー、ドアン、キン、ドールン、ホジェン、メンパ、マオナンの15民族が認証されたのである。更に1965年には周辺のチベット族と異なった民族の特徴を持つために、ロツパ族として認定され、この時点で、新たな民族認定作業は終わったのである。

第三段階は1965年以後である。1978年雲南省シーサンパンナ地区に住む文字文献がないジノー族を民族願望が強い理由をもって、特別認定されたのである。

1950年代末より、民族籍の識別を行ってきた民族籍の回復や、変更などが大規模で行われ、結果的には、漢民族のほか、新たな少数民族の認定を含め、中国全国で56の民族になったのである。そして3500万人以上が新たに少数民族として認定され、その大半はそれまで漢族として申請した人々だったのである。だがこの少数民族の認定は申請制であり、認定作業終了とは言え、様々な

条件理由により、申請したにもかかわらず、認定されなかった民族も存在しているのである。

#### 四 少数民族の名称

中国漢民族以外55の少数民族の名称について、極力各少数民族の自称を尊重することで、民族の名称が決められているが、中には古来の文献上の伝統的名称と異なり、また一般に広く使われていたものおよび国際的に定着した名称と相違する場合も多くみられるのである。この点について、幾つかの事例を取り上げ説明を加える。

まず一般に使用されている名称と相違する例について、かつて雲南省シーサンパンナ・タイ族自治州に住むハニ族の集団はウォニとかアイニと自称しているため、尊重して「ウォニ族」と呼ばれていた。しかしハニ族が最も集中して居住しているのは西のベトナムの哀牢山地周辺で、彼らはハニと自称している、よって中国政府はハニ族と名称を決めている。

ほかに国際的に定着している名称と異なる例を見よう。チンポー族は、雲南省の西北山地に住んでいるが、この西北山地は国境を越えて、ミャンマーまで伸びて、ミャンマーではカチン高原と呼ばれ、そこに住む少数民族をカチン族と呼んでいる。要するに、同じ民族が国境によって、民族の名称が異なっている。このような事例を生じさせたのは、国際間で承認された国境線は、その周辺の民族の意思と利害などを無視して決められたことが多く、また政治的理由により、民族の名称を判断されたことに起因する事例も多かったのである。

他に民族の新名称が古来文献的に呼ばれた名称を変える事例がある。それは1951年5月16日政務院より民族差別をなくすため少数民族に対しての差別、侮辱な呼称を改める指示が出ている(注10)。よって、「ワカ」族の「カー」というのがタイ語で奴隷或いは隷族民を示す言葉であるため、62年に「ワ」(佉)族と名称を変えている。また広西の獐族の「獐」は明朝から民国までの表記で、ケモノ偏が付いて、少数民族に対しての軽蔑であるため、1965年に現在のチワン(壮)族と改称されている。同じ例としては「猺」族から「瑶」族と改称されたのがあった。あとプミ族について、元王朝時代以来は「西蕃」と呼ばれたが、「蕃」は差別的意味があるため、1960年「プミ」(普米)族として名称が確定されたのである。新たに認定された小規模の民族は、自分の歴史についての記述をもたない民族が多いから、その歴史活動が全て漢民族の歴史文献から記述されていたため、不適切な呼び名が残され、改名作業が不可欠になったのであろう。

以上、中国少数民族が55に認定されたのであるが、各民族の人口規模、歴史的活動など多方面において、顕著な相違性が見られる。かつてユーラシア大陸を制覇し、最初に異民族の王朝を作り、1000年以上の歴史を持つモンゴル族、さらに清王朝を建て中国最大の版図を確保した満州族、漢族と長年抗争を続け、言語、文字、宗教など強いアイデンティティをもつ、大規模な集団であるチベット族、ウイグル族などもあれば、雲南、貴州地区に住む認定されたばかりで、文字もなく、人口の少ない少数民族もある。その全ての民族は平等である原則の下で共存させなければならない現実には、漢民族との関係だけに留まらず、それ以外に、長い歴史経験および現在における複雑な異民族間の問題が生じることも避けられないであろう。次の章では、これまで述べてき

た中国多民族の複雑な歴史を踏まえて、この論集に収録された少数民族の現在を考えるために、これまで調査した論文の宗旨と内容について、重点的に解説を加える。

### Ⅲ 解説

筆者の少数民族地域のフィールドワーク調査では、対象地域に関して限られてはいるが、調査対象である各民族は、中国の歴史、政治などにおいて、特に重要視せねばならない民族であると考えている。ここで、本論集に収録された各論文の注目点について、簡単に説明を加えたい。

本書に収録した論文は、基本的に調査の時期に沿った順番になっているが、内容については、中国国内の少数民族地域に関するものが6篇である。中には少数民族が最も多い地域の雲南と新疆地域をそれぞれ2回に分けて調査した内容である。さらに少数民族の人口が3番目に多い回族の現代化問題について、彼らが古より自治区以外の都会である北京につくられた由緒ある「牛街」に居住する回族の現代化問題を取りあげた調査も含まれる。それ以外に、特別資料として、中国と歴史上深く関わりをもったモンゴル国のダルハン市を調査したものも加え、合計7篇である。

論文の内容に関しては、各篇共にそれぞれの少数民族に関する基本知識について明確な説明を加える。そうすると少数民族に対して知識がなくても、より読みやすく、問題点については容易に理解が深められると考えている。論文の篇数は多くないが、実際これらの調査をした地域に秘められた多くの特徴からは、現在少数民族が抱える問題と共通するところが多々あるため、今後はほかの少数民族地域の問題提起の手掛になるであろう。

次に調査の視点について説明を加える。これらの論文には、共通して各地域の食文化の視点から、現在の生活実態と意識の変化を見ることが多くある。論文中にも説明はあるが、「食」というのは、人間が生きる上、不可欠な営みの一つである。特に経済開発の政策が日々拡大される過程で、食習慣に与えた変化は計り知れないものである。それに関連して、当然多方面から生活に影響を与え、様々な問題を生じさせるのである。要するに、ここに焦点を置くことによって、少数民族たちが共通して抱える現実問題の全体像が見いだせる重要な参考材料になると考えるのである。

以下は、特に調査した幾つかの地域の特徴性について、3か所に限定して簡単に説明を加えたい。

まずは、筆者のチベット族居住地域に対しての調査について述べる。一般にチベット族の居住地域に対し、中国国内だけではなく、世界においても、謎に満ちた秘境的なイメージがもっとも強く、人々は興味深さをもっている。歴史上、中国の各漢民族王朝に、チベット地域の王朝との紛争は絶え間なく起っている。被害も大きかったため、唐時代にはその苦境から脱出するために、現在でもチベットの人々に敬意を受けている唐王朝の貴族の娘「文成公主」が、和親政策の下で、

チベット王朝との婚姻関係を結び、仏教の他に、当時の漢文化を大量にチベット（当時は吐蕃と呼ぶ）に持ち込み、生活など多方面において、深く影響を与えたのは事実である。実はまた中国においては、この「文成公主」の歴史事績を通じて、チベットを知る人々が多かったという。

筆者はチベット地区について、2001年の調査後、2016年に再調査を行ったのである。2度の調査の間隔は十数年の年月を経過している。2016年の訪問時では確実に現地の経済開発が活気よく迅速に進化した形跡がみられた。それは生活意識にも影響し変化をもたらしているのは必然である。一方この激しい現代化の風潮が起伏する中、一般の庶民たちは人生の基盤である仏教の信仰に対して、依然として生活に浸透させ続け、その信念は強く固められているのである。チベット民族においては、生活の基盤において、仏教を誇らしく、人生観にも欠かせない存在意識はこれからも続くであろう。

次は2003年雲南省納西族モソ人についての調査を説明する。

この地域には、実に多数の少数民族が居住しているが、2度の調査を行い、広く各地を歩きわたり、多くの現地人と出会い、家族のように受け入れられ、共に生活することができたのである。ここで特に注目したいのは、2003年雲南省内の瀘沽湖に住む納西族の一支である摩梭人（モソ人）の調査である。詳細な歴史と調査内容に関しては、論文で説明を加えているので割愛する。

この民族の特徴としては、古より母系家族の制度を長く続け、現在では、現代化の風潮と現代国家としての政策の実施に伴い、「通い婚」の形こそ実存しなくなったが、古い伝統から伝わる母系社会の理念と意識は、いまだ生活概念の底に、密かに残存していると見受けられた。彼らが経済開発に直面した様々な困惑に対し、自ら対策を考えて乗り越えるため、強い力を発揮するところに注目したいところであり、他の少数民族の現代化への歩みにもよい手本になるであろうと考える。

続いて、2016年大都市北京に住む回族たちについての調査に触れる。

回族とは、中国にいるイスラム教の信者を指すのである。その複雑な歴史と宗教などについては論文で詳細に触れているので省略する。古より回族が北京で作らせた自分たちの「牛街」は、現代化のために、その由緒ある姿が消え去ろうとしたところで、さまざまな問題が引き起こされたのである。筆者は現地に入り、問題点を調査したのである。回族が大都市において、特に自分たちの民族が漢民族と区別できるために、イスラム教というアイデンティティを持ち、自分たちの古い地盤で、伝統生活を生き続ける現実の厳しさに対して、その解決策は完全なものではなく、妥協せずには自分たちの生き方、場所さえも消えてしまう可能性がある。この調査からは、大都市に関わらず、今後、少数民族自治区内にも多民族の混住がますます一般化される現実下、彼らの伝統も現代化と共に進化の持続が必要視されると考えたのである。

最後に、本書の特別調査資料として、2000年モンゴル国ダルハン地域についての調査に触れた

い。中国国内では、内モンゴル自治区があり、そこの住民が中国の一少数民族モンゴル族の集団居住地である。そして彼らは当然中国人として生きるのである。モンゴルは、全く別の国ではあるが、地理的、自然条件と生活の形態が内モンゴルとつながっているため、現代化の過程ではかなりの共通点が見られると考えている。

現在モンゴルは、全く独立した国であるとはいえ、上述したように、本来モンゴルという騎馬民族は、中国の歴史上、強い統治者として元王朝を建て、欧亜大陸まで版図を拡張し、大帝国統治の歴史事実と多くの痕跡を残している。帝国の滅亡後、国の完全独立ができるまでは、様々な困難を乗り越えたとはいえ、それまで70年間のロシア支配の名残は、まだまだ強く見受けられたのだ。

筆者が約一か月滞りし調査した時期は、まさにモンゴルが現代化を進み始める最中であった。彼らの実態を調査する際、中国と歴史的縁深い関係を持つことで、また地理的に陸続きであるため、当然のように、現代化における経済開発の実態からは、中国と密接な関係が随所に露呈している。現代化という大きなテーマを研究するに当たって、このモンゴルにおいて、特にダルハンという地方都市を対象に行った調査は、多くの視点から多数の問題提起のヒントが隠されていると認識している。よってこの論集の最後に調査資料としてこの論文も収めたのである。

## 注

注1 「中国民族志」楊圣敏主編 2003 緒論 P14-P15を参照。

注2 1921年河南省澠池県仰韶村で発見された BC5000－BC3000の間黄河中流全域に栄えた新石器文化として、現在の河南省、陝西省、山西省の地域に存在したのである。

注3 「史記」巻110「匈奴列伝」第五十である。

注4 「匈奴通史」林幹著 人民出版社 1933 P4を参照。

注5 「中国史の中の諸民族」川本芳昭著 山川出版 2009 P17-P18に参照。

注6 概説「中国の少数民族」馬寅主編 君島久子監訳 三省堂 1987 第五章「少数民族の歴史と情況」を参照。

注7 「突厥」とは6世紀から8世紀において、モンゴルから中央アジアを支配したトルコ系の遊牧民族で、突厥文字を持っていた。

注8 「中国少数民族事典」田畑久雄 他著—1 中国少数民族の概況を参照。

注9 「周縁からの中国」毛里和子著 東京大学出版会 1998 P64-P65を参照。

注10 同注8 第4章民族政策の軌跡 P98を参照。

## 主な参考資料

- 概説「中国の少数民族」 馬寅主編 君島久子監訳 三省堂 1987
- 中国再考 葛兆光著 辻康吾監修 永田小絵訳 岩波文庫 2015
- 中国史の中の諸民族 川本芳昭著 山川出版 2009
- 現代中国の地域構造 中藤康俊編 有信堂 2003
- 周縁からの中国 毛里和子著 東京大学出版会 1998
- 中国少数民族事典 田畑久雄 金丸良子 新免康 松岡正子 索文清C.ダニエルス著 東京堂出版  
2001
- 民族の会おうかたち 黒田悦子編 朝日選書 1994
- 匈奴通史 林幹著 人民出版社 1983
- 突厥史話 何星亮 郭宏珍著 五洲传播出版社 2008
- 中亚的民族关系历史现状与前景 潘志平主編 新疆人民出版社 2003
- 中华民族源流史 吕思勉著 九州出版社 2009
- 中国民族志 杨圣敏主編 中国民族大学出版社 2003

(せき きりん：アジア文化学科 教授)